

# Predation

栞川七海

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

タイトルの通り、捕食をモチーフにしたいじめの話です。

主人公どころか登場人物皆喋りません。

セリフ、まさかの1箇所だけです。

※初投稿作品です。

# 目次

P  
r  
e  
d  
a  
t  
i  
o  
n

—  
1



## P r e d a t i o n

ある日の朝、いつもの登校路で一羽の小さな雀を見かけた。

アスファルトで固められた真つ黒な道にばら撒かれていた、米粒をついばみに来たのだろう。

必死に米粒を拾い食べる姿は、雲一つない晴天に機嫌を悪くしていた私を癒してくれた。

しかしその時、突如として道端から黒い影が飛び出してきた。

それは黒猫であった。

素早く雀を捕えた黒猫は、すぐさま道端へと隠れる。

そしてそこで、鋭い爪と歯を駆使して雀を食べ始めた。

べちゃ、ぐちゃと小さな音がする。

雀は最後まで反抗したものの、自然界のルールに逆らうことはできず、その命を散らした。

私は、雀が食べ尽くされるその時まで、その様子を見守っていた。

雀が食べられていくその光景は、まさにグロテスクと言うべきだろう。

しかし、そのグロテスクな光景と反対に、私の心は昂っていた。  
この光景は、ヒトの世界によく似ている。

今日も上靴がなかった。

―バケツの中で雑巾と一緒に水浸しになっていたから、来賓用のスリッパを使った。

今日も机に落書きがされていた。

―油性ペンで書かれていたから、とりあえず壊れてガタガタの予備机を使った。

今日もロツカーにゴミが詰められていた。

―腐臭が酷かったから、ビニール袋に入れて焼却場に持っていった。

今日もいつもと何ら変わらない日々、人はこれをいじめと言う。

私は焼却炉の中で燃え尽きていくゴミを見つめながら、ここに飛び込んだ時のことを  
考える。

所詮この世は、どこも弱肉強食の世界なんだ。

私という弱者は、クラスメイトという強者に食われる運命にあるのだ。

だから私はあきらめた。

これが普通なのだとあきらめて、淡々と毎日を過ごしてきた。

何をされても反応しない。

けれどそれが気に食わないと罰を受ける。

その生活が変わることはない、私は知っている。

でも、どんなに諦めていても、変わってほしいと願ってしまうのは人の性だ。

願ってしまうのも、期待してしまうのも、全部…。

—だけど、その願いも期待も、すべて無意味なものに変わった。

だってあの人達は、私を殺そうとした。

4階から窓の外を見ていた私の背中を、あの人達は思い切り押し込んだ。

転落防止の手すりは故障中で、上にあげられていた。

だから押された私の体は、窓の外に向かって思い切りつんのめった。

足も少しだけ浮いていた。

もしかしたら、本当に落ちていたかもしれない。

なのにあの人達は、驚き戸惑う私の姿を見てクスクスと笑っていた。

「早く死ぬ」とでも言わんばかりの笑顔で…。

気付けば私は、屋上のフェンスを越えた先に立っていた。

数センチメートルの床が、私の命をつないでいる。

目の前に広がる風景は、とても美しかった。

先ほどまでは見えていた太陽も黒い雲に隠れ、光は遮られる。

私が飛び降りようとしているのを後押しするかのようになり、強い風が吹き付ける。

「……」

私は覚悟を決めて、飛び降りようと下を見た。

その時、不意に頭をあの「ある日の雀」がよぎった。

あの雀は、命の果てまで黒猫に反抗し続けていた。

その雀が、なぜか自分と被ってしまった。

私は思わず笑う。

私は空へ踏み出し、勢いづけて飛び出す。

身体の降下が始まり、私は目を閉じた。

最後まで生きようとしたあの雀と自分が被るだなんて、そんなこと。

――生の途中であきらめて死ぬ私は、あの雀よりも弱いのに。

Fin.